

上郡町の偉人

大鳥圭介

「鵬程万里」第十三回

著者 中川由香

「南柯紀行」は、明治元年に圭介が伝習隊を率いて江戸を脱走し、新政府軍と一年以上戦い続け、箱館五稜郭で降伏し投獄されるまでを記した記録です。指揮官として戦況を把握し続けただけあり、記述は客観的で詳細です。戊辰戦争の研究では必ず参照され、一次史料として高い価値が置かれています。達意の文章で抒情を緻密に記し、戦争文学としても一級品です。

「レイテ戦記」など多くの戦記を記した文学者大岡昇平にとつて、南柯紀行は「私が常に愛読する敗走記」でした。大岡は圭介の詩情に感じ入り、会津での足跡を追い、「保成峠」「檜原」を著しました。その中で「南柯紀行を読んだ私が感服したのは、自己弁護のない事、筆をまげて敗戦を糊塗する意が、いささかも見られないことである。行文簡潔、よく意を尽し、戦鬪の頗る散文的な叙述の間に漢詩なぞ挿んで風流にも事欠かない」と述べました。餓鬼道行軍中にようやく入手した卵二個を圭介に献じた兵士に感動したり、「万山千峰愁色を帯び弾薬なく食糧なく」の記述に自己の敗戦体験を重ね合わせたりと、大岡は圭介への深い同情と共感を記しています。

南柯紀行を読めば、語彙の豊富さ、感性の豊かさ、臨場感に感嘆します。例えば「苦しかった」という一言を表すにも、困却、難渋、辟易、困窮、困苦、辛苦、困弊、憔悴、窮迫、艱難、艱苦、

苦楚百端至らざる無し、などの語を用い、日本語の髄を極めていきます。この閑谷学校で培った漢学の素養に洋学の論理性が合わさり、類稀な文章力となっています。さらに、悲壮で苛酷極まりない現実で、自己を突き離して記すのはどこかユーモラスです。兵士に粗暴な真似はさせないと村人に約束した直後に、兵が村人から酒樽を奪ってしまい、圭介が弁償して詫びた。敗戦で味方が来たと思いつつ近寄つたらそれが敵であり雨あられの銃弾が襲ってきた。自分が建設した牢獄に、自分が入られた。それらの記述は、悲惨であるのに読む者がつい笑いを漏らしてしまうものです。人間、笑うしかない、という状況があります。苦難の極みに達して考えてもどうしようもない時、何か突き抜けて、開き直るしかない、一種悟りの境地まで感じ取れます。圭介は「秋の霜冬の雪をば凌ぎてぞ人や見分けん常盤木のいろ」と詠みました。苦しい境遇ほど、そこに人間の底力と希望を見出そうとする圭介の人間性が、文章に垣間見えます。

圭介の感性が象徴されています。その文に以下のとおり、圭介が南柯紀行に込めた想いを凝縮しています。「世に公になつた戦記は、勝利の時は誇張し、敗北時は詳細を書かず曖昧にし、敵の死傷者は水増しし、味方の死者は隠蔽して事実を表さない。これが普通だが、後世の人間を惑わし支障が大きい。本書は、千山万水の行程で目にしたままの実景、経験した実情を述べ、特に兵士の遭遇した苦難は詳細に記し、笑われる事も恥ずべき事も飾らずそのままに、忌憚に触れる事も手加減せずに記載した。願わくば事実の確実な流れを掴み、文の雑で俗な事を笑わないでほしい」上で述べた大岡は、圭介の意を余す事なく汲んでいました。

戊辰戦争の実録は明治の世に求められ、数多くの戦記が出版されました。一方、南柯紀行が公に発表されたのは明治二十四年の維新史料が初めてのことでした。戊辰戦争が終結してから二十年以上後の事です。世に出す記録として圭介の心が整理されるまで、それだけの時間がかかったのでしょう。

「南柯」は南に伸びた枝の事。この枝の下で栄枯盛衰の夢を見たことから「南柯の夢」は儚く虚しいものを指します。戦後二十年経ち、自ら国作りに貢献した明治の世で、圭介は戊辰戦争を儚く虚しいものだったと感じたのでしよう。一方、明治二年時点で、圭介は南柯紀行を「大義日記」と名付けていました。圭介は自分と仲間や部下達の行動は、単なる反乱ではなくあくまで義に基づいたものだという想いが強かったでしょう。それが儚く虚しい想いになるまでの心の変遷が、題名から感じられます。